

幕末日本とナポレオン情報

Information about Napoleon in Bakumatsu Japan

岩下哲典

Iwashita Tetsunori

はじめに

江戸後期から幕末維新期の日本において、ナポレオン情報が果たした役割や意義を述べるのが本稿の目的である¹。

最初に江戸時代における徳川幕府の海外情報の管理の実態に関して簡単に概観する。次に、最初に日本にもたらされたナポレオン情報が、19世紀初期のゴロヴニーン事件のさなかであり、ゴロヴニーン一行の中にいたロシア軍人ムールの獄中上表であったことを指摘する。さらにこのナポレオン情報が、当時最高の西洋事情研究機関であった幕府天文方に与えた影響、またその天文方がオランダ商館あるいはオランダ人等を通じてアムステルダムでなそうとした出版計画とその結果に関して述べる。そして、その後、天文方は幕府当局からの政治的弾圧によって萎縮を余儀なくさせられ、ナポレオン研究は一蘭学者、すなわち小関三英の手によってなされたこと、彼の著作が、佐久間象山、吉田松陰や西郷隆盛などに及ぼした影響に関して言及し、また徳川慶喜とナポレオンに関して述べる。全体としてナポレオン情報が、江戸後期や幕末の日本にどのようなインパクトを与えたのかをお話したい。最後に、幕府内部や明治政府内の親フランス派とフランス軍事顧問団についても言及したい。

徳川幕府の情報管理

今日、17世紀中葉から19世紀の、つまり「開港・開市」以前の徳川幕府の対外関係は、いわゆる「鎖国」という言葉で表現されている。しかし、その言葉は、19世紀になって、

¹ 本稿に関係する岩下の著作は以下の通り。全編にわたって参照している。『江戸のナポレオン伝説』中公新書、1999年。『江戸の海外情報ネットワーク』吉川弘文館、2006年。『[改訂増補版]幕末日本の情報活動』雄山閣出版、2008年。「江戸時代における日露関係史上の主要事件に関する史料について」竹内誠監修『外国人が見た近世日本』角川学芸出版、2009年。岩下・小美濃清明編『坂本龍馬の世界認識』藤原書店、2010年。「一八世紀～一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容」笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版、2011年。『江戸将軍が見た地球』メディアファクトリー新書、2011年。岩下編『江戸時代来日外国人人名辞典』東京堂出版、2011年。『日本のインテリジェンス——江戸から近・現代へ』右文書院、2011年。

来日ドイツ人ケンペルの表現を日本人が翻訳造語したものである²。かつ、その言葉の持つ意味は、実はかなり複雑な様相を呈していて、実態は多岐にわたる。

思うに近世の対外関係の眼目、つまり為政者の最大の関心は、体制を揺るがしかねないキリスト教の禁令（1612年）であることは論をまたない。キリスト教の流入を防ぐには、海外からの人・物・情報の管理・統制を十分に行う必要があった。そのために、以下の政策が矢継ぎ早にとられたと言ってよいだろう。

すなわち、長崎奉行を設置し長崎を直轄地化した（1633年）。そのうえで、日本人の海外渡航を禁止し（1635年）、ポルトガル船の来航も禁止した（1639年）。加えてオランダ人を出島に軟禁状態にし（1641年）、幕府直営貿易は長崎に限定、それも唐（中国）・蘭（オランダ）のみとした。これにより海外情報はオランダと中国に多くを依存する体制ができあがった（そのほかには偶然漂着した異国人からの情報、偶然にも帰国できた漂流民の情報があった）。長崎（港）の防衛は、福岡・佐賀・大村藩の軍役として担当させた。一方、幕府は対アイヌ民族交易は松前藩（1604年）に、対朝鮮王国応接は対馬藩（1607年～）に、対琉球王国応接は薩摩藩（1609年、1634年～）に担当させた。また、寛永期には、海岸防備と通報システムを全国に張り巡らし、オランダ人には、その忠節の証として、定期的な海外情報たるオランダ風説書を提出させた（1644年～、ただし制度化は1659年）³。こうして、実態としてのいわゆる「鎖国」が成立したのである。ただし、近年、中国の海禁政策の研究成果をもとに「海禁」と呼ぶこともある⁴。ただこの用語も、使用されたのは近世後期で家光時代からの対外関係を直接示す言葉ではない。私見では便宜的に、いわゆる「鎖国」が適当と考える。

ゴロヴニーン事件と「ムール獄中上表」について

上記のごとく、徳川幕府の対外関係、いわゆる「鎖国」は、外交文書・使節の交換関係にある「通信の国」としての琉球・朝鮮と直轄貿易を行う「通商の国」としての中国（明・清）とオランダに限定されていた。ところが、16世紀後半にロシアが極東に進出しはじめ⁵、18世紀中葉には日本近海にデンマーク出身士官スパンベア指揮のロシア軍艦が出没し⁶、18世紀末には「開港・開市」（通商）を求めるロシア使節ラクスマンの根室来航

² 大島明秀『「鎖国」という言説——ケンペル著・志筑忠雄訳「鎖国論」の受容史』ミネルヴェ書房、2009年参照。

³ 松方冬子『オランダ風説書と近世日本』東京大学出版会、2007年、同『オランダ風説書』中公新書、2010年参照。

⁴ 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988年；荒野泰典他編『近世的世界の成熟』（日本の対外関係6）吉川弘文館、2010年参照。

⁵ ロシア南下の実態については、秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年および平川新『開国への道』（日本の歴史・江戸時代・19世紀）小学館、2008年詳しい。なおこの近世後期の対外関係に関しては、藤田覚『近世後期政治史と対外関係』東京大学出版会、2005年参照。また以下の研究も参照した。郡山良光『幕末日露関係史研究』国書刊行会、1980年。大熊良一『幕末北方関係史考』近藤出版社、1990年。木村汎『日露国境交渉史』中央公論新社、1993年。

⁶ 長島要一『日本デンマーク交流史 1600-1873』東海大学出版会、2007年参照。

があった⁷。さらに19世紀初頭には同じくロシアのレザーノフの長崎来航と幕府の拒絶にあって、レザーノフの部下が腹いせのように行った蝦夷地襲撃⁸によって、徳川幕府は北方への警戒を強めていた。すなわち、幕府直轄たる蝦夷地では、ロシアの来襲に備え最高度の警戒態勢をとっていたのである。

1811年、北太平洋の測量のため、日本に接近しつつあったロシア海軍ディアナ号艦長ゴロヴニンは、そうとは知らず、国後島に少人数で上陸したところを幕府側に捕縛され、松前に監禁された⁹。ディアナ号に残った副艦長リゴルドは報復措置として、幕府御用商人高田屋嘉兵衛を捕え、のち双方の人質交換が成立して、1813年この一件は決着した。これによりロシア人は約束を守る、よき隣人との印象を幕府に与えたのである。なお、現代の日本でこのように考える日本人は少ないのが実情である。

さらにこの時、ゴロヴニンとともに監禁された一行の中にムール少尉というロシア軍人がいた。松前に監禁された直後の1812年にゴロヴニンらは脱獄を図るが、ムールだけは脱獄しなかった。絵心があったムールは、その描く絵を通して日本人と良好なコミュニケーションをとることができるようになり、日本に帰化して日本政府（幕府）の外国語通訳として働きたいとの希望を持つに至ったのである¹⁰。なお、これは長島要一氏のいう「文化の翻訳」¹¹の原初的狀態がムールに生じたのではないかと分析できる。すなわち、長島氏によれば「文化の翻訳」は、「世界を『他者』の目で見ることの出来る能力、自分の文化的背景を他者のそれに照射して、自他の文化の総体を俯瞰できるバイカルチャルの能力」とされる。ムールが、日本とロシアの文化の総体を俯瞰できたとは思わないが、少なくとも日本にシンパシーを覚え、日本に帰化して日本政府のために外国語の通訳になるためには、ロシアを相対的に見て、ロシア国家からの離脱を考えたわけで、ロシア自体を相対的に見ていたことを示しており、「文化の翻訳」状態がムールに生じつつあったと考える。

ともかくムールはゴロヴニンと同一の行動（脱獄）をとらなかったのである。おそらくムールは史上初の日本帰化熱望ロシア人として特筆されるべき人物である。ところで、獄中に残ったムールは、のちに「ムール獄中上表」と名づけられる、日露関係史上のみならず、対外関係史上重要な資料を作成した。ロシア語で書かれた上表は、ロシア通詞村上貞助らによって日本語に翻訳され、松前奉行を経由して幕府老中に上申された。

上表の内容は、上表を書くに至った心情、レザーノフの長崎来航、ゴロヴニンの職務とその活動、レザーノフの部下フボストフの蝦夷地襲撃、ゴロヴニンの脱獄事件、ロシア国情、ヨーロッパおよびナポレオン情報である。いずれも当時の幕府にとって重要な情報であるが、ここでは特に近世日本として重大なナポレオン情報に関して述べておく。

⁷ 木崎良平『光太夫とラクスマン』刀水書房、1992年、および生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』ミネルヴァ書房、1999年参照。

⁸ 木崎良平『仙台漂流とレザーノフ』刀水書房、1997年、および松本英治「19世紀はじめの日露関係とオランダ商館」『開国以前の日露関係』東北大学東北アジア研究センター、2006年参照。

⁹ 真鍋重忠『日露関係史』吉川弘文館、1978年参照。

¹⁰ 「ムール獄中上表」の写本の一つ「魯西亜人モウル存寄書」（国際日本文化研究センター所蔵）および『日本幽囚記』岩波文庫、1943～46年参照。

¹¹ 長島要一『「文化の翻訳」と先駆者森鷗外』『鷗外』第88号（2011年）参照。

実は文献上最初のナポレオン情報は、この「ムールの獄中上表」なのである。これまで、1813年に日本にもたらされたロシア語新聞のナポレオンの記事が最初といわれていたが、1812年のこの上表が、文献上、現在知られる最も古いナポレオン情報なのである。つまりオランダ商館が、ナポレオンをひた隠しに隠したため、ナポレオン情報は南の長崎ではなく北の蝦夷地、それも偶然捕縛されたゴロヴニーン一行からもたらされたのである。そして、リゴルドがもたらした前述のロシア語新聞に、オランダの首都アムステルダムがナポレオンの勅令によりナポレオン帝国の第三の都市になったと書かれていたことから、長崎出島のオランダ商館に真偽の程が問い合わせされた。

それに対する長崎のオランダ人の言い訳がふるっている。

「そういうこともあるかもしれないが、私は知らない。」

こういわれても幕府には確かめるすべはなかった。やはり西洋関係の情報ルートが一つでは限界があったのだ。

幕府天文方のヨーロッパにおける出版計画

だが、当時、幕府における最高水準の西洋学術・知識の調査研究機関であった、天文方（本来は暦や各種地図を作製する機関）はひるんではいなかった。

1816年、ゴロヴニーンがロシアで『日本幽囚記』を刊行した。これがオランダ経由で長崎から幕府天文方にもたらされた。1825年、早速天文方でオランダ語版を翻訳したところ、「ムール獄中上表」と相違する箇所がいくつも見つかったのである。ムールは日本にシンパシーをもって上表したが、ゴロヴニーンはそうではなかったことであろう。ムールの方を先に読んでいた天文方は、ゴロヴニーンの言は正しくないと考えた。そして、「ムール獄中上表」の諸本を収集し、定本を確定して、それをオランダ語に翻訳し、さらには、オランダ商館に依頼して、アムステルダム等ヨーロッパで出版を計画した。ムールとゴロヴニーン、どちらが正しいか、ヨーロッパの人々に判断してもらおうと考えていた¹²。この計画の推進者であった書物奉行兼天文方高橋景保が、1828年のシーボルト事件で失脚しなければ、実現していたかもしれない。高橋があればシーボルトに肩入れしたのは、シーボルトを介して、アムステルダムでの出版を実現したかったからと考えられる。高橋のもともとの思惑は、もちろんヨーロッパ情報を入手することもあったが、逆に、日本発の情報をヨーロッパで発信することもあったのではないかと考えている。そうであれば、これなどは、実に高度な、幕府一部機関の情報収集活動（インテ

¹² 注10「魯西亜人モウル存寄書」では「ゴロウインは新都に帰りて爵一級を陞せられ、躬其始末を詳記し遭厄日本紀事二策を著せり、予去年紀事和解浄書の旨を蒙り其の書を反復するにゴロウイン彼か出奔の儀に加はらざるを恨みモールを反賊たりと記し誹謗すること甚し、今此書を見るにモール豈反賊ならんや、ゴロウインか徒のモールの訴に従はさりしこと惜しむべけれ、実にゴロウインか出奔せしは己か誤にして魯西亜王国の恥辱と謂ふべし、而ゴロウインたとひモールか異見にい従はさりしを愉すとも豈に己か非を悟り死せしモールを罵り記するに忍ふべけんや、夷情黠恨惡むべきのミ、此書ことくモールか願の如く魯西亜人の手に入らば、孰か是非百年の後必長嘆息するものあらん」と記されている。また同書には全編にわたり諸本との校訂が施されており、定本を確定しようとしていたことが明らかである。本史料に関しては、松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店、1998年も参照。

リジェンス)と云ってよいだろう。情報を収集するだけでなく情報を発信してヨーロッパの世論を変えようという画期的な企画である。こうしたことを構想した江戸人がいたことを私たち日本人は誇りに思うべきであろう。

ただし、こうしたことは、実はひとり天文方だけではなく、蘭学者たちも考えていたことである。たとえば1774年の『解体新書』訳述も、漢文で書かれたのは、日本のみならず、漢字文化圏、特に中国において読まれることを想定していたといわれる。それゆえに現在でも中国の医学用語の中には日本経由のものもあるという。また、幕府医官桂川甫周は、オランダ・アカデミーの会員にも推薦されている。こうなると、もはや、いわゆる「鎖国」は、天文方や蘭学者の願いとは相容れないものとなっていく。つまり日本の行く末を思えば思うほど、現時点でさらなる情報収集活動を阻んでいる、いわゆる「鎖国」は足枷以外の何物でもない。それが変わらない以上、インテリジェンス活動は隠密的なものにならざるを得ない。ところが時としてそれが、発覚する。1828年のシーボルト事件、1839年の蕃社の獄がそれである。これらの事件はそうした芽をも摘み取ってしまうかに見えた。

その後のナポレオン情報

先に述べた、天文方の高橋景保は、オランダ商館長の服装の変化からヨーロッパ情勢の変転を察知し、ナポレオン情報をも収集した。その結果が、1826年の『丙戌異聞』『別埒阿利安戦記』だった。前者は、ナポレオンの簡単な伝記、後者はワーテルローの戦いに特化した戦記である。しかし、景保がシーボルト事件で獄死したため、その研究は、岸和田藩医で幕府天文方蕃書和解御用に任命された小関三英に受け継がれた。

三英は景保の仕事を批判的に継承し、略伝である『卜那把盧的略伝』(1829年頃)、さらに1832年から蕃社の獄で自殺する1839年まで『那波列翁伝』を翻訳した。特に後者は、アミアンの和約までで終わっており、ナポレオンの伝記としては中途であるが、フランス革命への言及もあり、またナポレオンの伝記としては江戸時代もっとも詳しいものである。後に浜松藩医牧穆中や津山藩医箕作阮甫は、これに刺激を受けさらに充実したナポレオンの伝記を目指した。また、田原藩士松岡与権は三英による伝記を1857年に刊行し、さらにそれらを読んだ松代藩儒佐久間象山、長州藩士吉田松陰はナポレオンに関する漢詩を作り、薩摩藩士西郷隆盛は自らとナポレオンを重ねるなど、幕末の志士に大きな影響を及ぼした。

ほかにも古河藩家老鷹見泉石は、イタリア戦役の銅版画、鉛製の兵隊人形やネルソン記念小物入れなどオランダ渡りのナポレオン関連グッズを蒐集し、さらにはオランダ一國のみの詳細な地図を作製しているが、これもナポレオン情報が及ぼした影響と言えるだろう。

そのほか、最幕末の1867年には、福地源一郎が『那破倫兵法』を著した。これは、来べき戊辰の実戦に備えたものと考えられる。

おわりに

1867年、最後の将軍徳川慶喜は、いわゆる「大政奉還」の建白書（実態は「政権奉歸の建白書」で、「大政」を「奉還」とは書いていない）を朝廷に提出した。この時点ではまだ政権を返すと言っているだけで、完全に返したのではない¹³。慶喜が目指したのは、ナポレオン帝国であり、自らがナポレオンになることだった。しかし、王政復古、天皇親政が決定的になって、慶喜のもくろみは大きく外れた。ナポレオンになったのは明治天皇だったのである¹⁴。

それでも、幕府陸軍のフランス軍事顧問団ジュール・ブリュネらは、榎本武揚らと箱館まで転戦し、四稜郭を構築する指導までした¹⁵。フランス士官は、旧幕府軍の中にいた親フランス派に共鳴していたのである。そして驚くべきことに明治政府は1882年と1895年、ブリュネに勲章をも授与している¹⁶。明治政府の中にも親フランス派はいたのである。これは幕府や明治政府を問わず、ナポレオンの伝記が当時の日本人にいかにも広く読まれたかを示しており、ナポレオン情報が近世後期、幕末維新、明治と求められた証左なのである。

ナポレオンは、1821年にセントヘレナ島で死んだが、47年後の戊辰戦争でも、73年後の日清戦争でも、そして192年後の今日でも忘れ去られずに、我々の心の中に生きている¹⁷。

付記 シンポジウムでは、多くの方からご質問・ご意見をいただき、大変ありがたかった。頂戴した課題を果たしていないことをお詫び申し上げる。

¹³ 岩下哲典『高橋泥舟——高邁なる幕臣』教育評論社、2012年参照。

¹⁴ 明治政府が作ろうとした明治天皇のイメージは武人的天皇であるが、そのイメージの源流はナポレオンであろうと思われる。これに関しては、拙著『江戸将軍が見た地球』で少し触れたことがある。

¹⁵ 片山宏「ジュール・ブリュネと大鳥圭介」片桐一男編『日蘭交流史 その人・物・情報』思文閣出版、2002年参照。

¹⁶ 澤護『お雇いフランス人の研究』敬愛大学経済文化研究所、1991年参照。

¹⁷ シンポジウムでは、課題として以下の事を最後に述べた（要旨）。

今後は、「ムール獄中上表」を英訳して、ゴロヴニンの『日本幽囚記』とは別の視角をもった日本研究資料をヨーロッパやロシアの方々に提供したい。特に日本に帰化を希望したロシア人の事績は、最高に冷え切った日露両国の外交関係に一筋の光明となろう。なおムールの存在を今に伝える遺物として、ライフル自殺をしたムールのためにゴロヴニンがペトロパブロフスク・カムチャツキーに建てた墓石があるとされるが、いまだ誰も確認していない。これもぜひ現地で確認したい。ともかく、「ムール獄中上表」のもっとも重要な写本が日文研に所蔵されておりそれを日文研が主催する海外シンポジウム、それもロシアに距離的に近い北欧で紹介できたことは大変ありがたく思う。考えてみるとムールの思いを200年ぶりに紹介できたことになる。本シンポジウム開催に尽力された、長島要一先生、佐野真由子先生はじめ諸先生方に感謝申し上げます。